

異世代に対する子どもの関心と理解
——子どもにとっての高齢者の意味——
群馬女子短大

岡野雅子

【目的】近年の時代の変化は極めて速く、世代による差は著しい。異世代交流の成立の基本的要件は、対象世代に対して関心を持ち正しく理解することが不可欠である。それはまた、若年世代にとって「人間発達」や「加齢」に対する洞察を呼び起こし、自らの人生を展望する視点の形成となり、自分とは異なる状況にある他者の内なる世界に対する共感「やさしさ」の醸成へと作用すると思われる。本研究では、近未来に迫った高齢社会を担う子ども世代の、高齢者世代に対する関心と理解の現状を探り、異世代交流形成のための一助としたい。

【方法】群馬県高崎市内の公立校に在籍する小学校5年生121名、中学校2年生113名、高等学校2年生81名の男女計315名を対象として、質問紙による調査を行った。

【結果と考察】①高齢者のイメージ得点は、「やさしい」「落ちついている」「親切的な」が高いが、全体に小・中・高と発達と共に下降していく。②高齢者との交流の程度は、「別居で、よく行ったり来たり」が約半数で最も多く、1/4は交流の機会がほとんどない。③交流の内容は、高齢者と「TVを視る」「病気のお見舞い」は6-8割が体験しているが、「病気の看病」は1割である。「親は高齢者を大切にする」は発達と共に急減する。④高齢者の自己との関係は、小・中・高とも「尊敬」が最も高得点で次いで「参考」であるが、「尊敬」「参考」「展望」「情緒」「理解」は発達と共に有意に減少し、「憧れ」「関心」は低得点で群間差はない。自己の高齢期像は若年世代と仲良く交流したい、としている。⑤これらの結果から、発達初期は良好なイメージを持っているにもかかわらず発達と共に下降するのは、交流が表層的で、理解も乏しく、周囲の教育的配慮も少ない、などの要因とも相まって、彼らの現代社会への適応の一つの現れではないだろうか。

(本研究は、日本火災福祉財団ジェロントロジー-研究助成金を受けた。)